

走においては、3年間の実践の積みあげに立って、持久走での記録の向上よりむしろ、自分のめあてにむかってすすんで走ろうとする「意欲」の向上をねらい、評価していく方向にむかっている。

職業科の場面でも、同一教材複数課題をテーマとし、28名全員が取り組めるような教材探しに奔走した。また、校内職業実習の回数を増やして定期的実施し、学校生活の中でも、より社会に近い環境を定期的につくり出し、働くリズムの確立に務めた。昨年度着手した「職業科における評価の基準表」の作成は、本年度の大きな研究の柱であり、検討・改定を重ねて成案を得ることに尽力した。

昨年度にひき続き、社会で生きていける力を育てることに重点をおいた取り組みを行ったが、本年度の特徴は上記のように、従来当たり前のように見過ごされてきた面にもスポットを当て、個への対応がより一層細かくできるように大胆な改革に踏みきった点である。

【4】 生徒の実態

生徒の実態を把握するための諸検査は、比較対照しやすい利点から研究初年度より同じ検査を実施している。初年度の詳細な実態調査（紀要第10集参照）に基づき、本校高等部の生徒の実態と問題点がうきばりにされ、研究テーマの設定へと結びついた。年々、生徒の障害は重度・重複化し、諸検査による数値ではほとんど変容がないように見える生徒も多い。しかし、4年間という長いスタンスでみれば、数値には現わすことの難しい意欲面や、生活年齢による変容等もあることを頭におき、数値にばかりとらわれない実践の展開を試みた。

〔1〕 障害別にみた実態

	程度	ダウン症	自閉症	てんかん	単純精薄	その他	重複
1年	軽1 中5 重3 (計9名)	1	2	3	2	小人症1場面カン黙1 情緒障害1	2
2年	軽0 中6 重3 (計9名)	2	2	0	3	情緒障害1 PW1 構語障害1	2
3年	軽2 中6 重2 (計10名)	2	0	1	5	CP後遺症1 CF1 小人症1色覚異常1	3
合計	軽3 中17 重8	5	4	4	10		7

※ 軽…軽度 中…中度 重…重度 PW…プランターウィリー症候群

CF…クラインフェルター症候群、言語未発達の子供6名

(目的) 障害の種類や程度を把握し、全体的な傾向をつかむ。

(考察) 障害が多種多様で、主障害以外にも何らかの障害を有する重複障害の数が増加している。

また、軽度は1割弱で、重度化の傾向が強く、発達段階の違いが非常に広がっている。

[2] 本校在学歴の実態

(目的) 同じ障害を持っていたとしても、その教育環境のちがいによって発達は少なからず左右さ

◆本校在学歴

在学歴 学年	小中高等部	中高等部	高等部	計
1年	4	3	2	9
2年	2	5	2	9
3年	3	2	5	10
合計	9	10	9	28

れると考えられる。28名の生徒の本校高等部入学部前の教育環境の概要を把握し、この視点からみた高等部の抱える問題点を探ってみたい。

(考察) 小学部から本校の教育を受けている生徒は全体の36%で、半数の生徒は公立の小・中学校の心身障害児学級からの入学・転入によることがわかる。特に高等部

になってから入学してきた生徒は障害の程度も軽く、教科学習を中心とした教育課程での取り組みの結果、知的学習能力が比較的高く社会性にも富むという特徴がみられる。その反面、物事に取り組もうとする意欲に欠け、精一杯力を発揮する経験が乏しいという面も共通してあげられる。障害や発達段階の違いも多少はあるであろうが、養護学校だけの世界しか知らない生徒と、そうでない生徒の間には生活経験、地域との交流等の面からみても、生活そのものの幅が大きく異なると考えられる。このように、個々の受けてきた教育環境により28名の個人差はさらに広がり、合同学習や一斉授業の困難さを増しているのではないかと推察される。しかし一方では、この実態を生かして、いろいろな発達段階の生徒たちを1つの集団として学習を展開する中で、生徒たちの間に自然に「学び合う」姿勢が生まれてくるという利点もみられ、それはどんなに工夫された教材教具や配慮にもまさるものだといえよう。

[3] 諸検査による実態

(1) 津守式乳幼児発達検査・田中ビネー集団知能検査

(目的) 一人ひとりの発達段階や発達の偏りを適確にとらえ、指導の手がかりやグループ編成の参考にする。

(考察) 28名中、集団知能検査にかからない生徒が20名と、大半を占め、全体的に知的発達レベルが低く、精神的にも発達の遅滞があるために、指示されなければ動けないという実態がある。

(2) 運動能力・体力テスト (資料編参照)

(目的) 一人ひとりの運動能力や体力の測定値により、からだの働きそのものの全体的な傾向をつかみ、特に劣る部分の強化など指導の手がかりとする。また、運動場面でのグループ編成の参考とし、その実践の評価にも利用する。

(考察) 学部内での運動能力や体力の個人差が非常に大きい。全体的にレベルは低い、特に背筋力、肺活量の測定値が大幅に低いため、身体機能を十分に活用できない実態がある。これらの身体的実態は、やる気等の意欲面、持続力、集中力の面にも大きく影響を与えていると推察される。

(3) 体格・体位〔研究紀要第10集、11集参照〕

(目的) 身体そのものの数値的な実態をとらえ、身体の発達や発育の現状を直視する。

(考察) ・身体や体重の関係からみると、肥満傾向にある生徒が多く、全体重に占める脂肪の割合も多い。

・骨の発達ではあまり劣っていないが、筋肉のつき方では大きく劣っており、歩く・走るなどの日常生活の動きもスムーズでない生徒が多い。

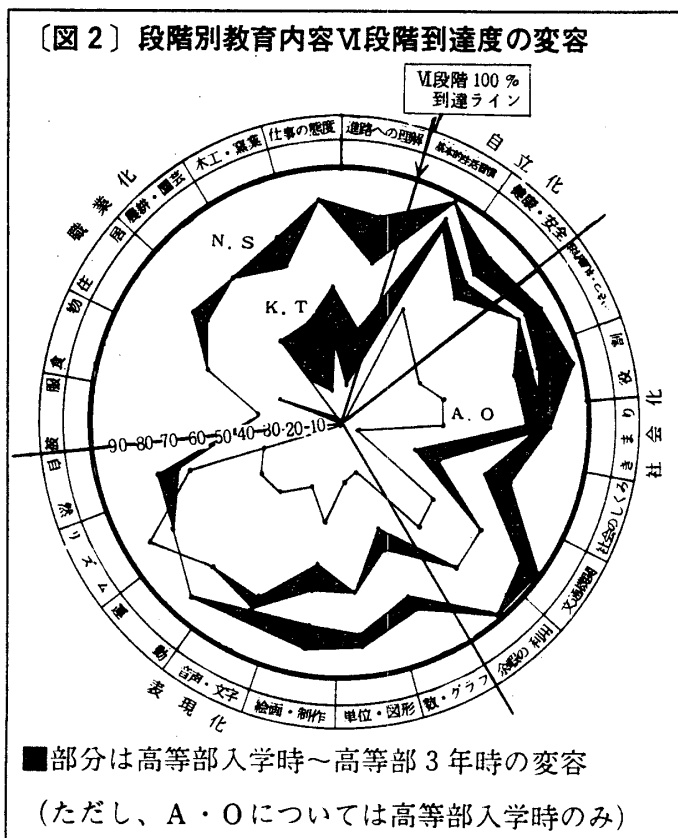
・見ためには健常者とかわらない身体つきにもかかわらず、筋力があまりなく、巧緻性に欠けるので多様な動き、細かい動きが苦手である実態が明らかになった。

(4) 意欲・態度 (特に職業科における本校試案の基準表による)

(目的) 学習への (特に働くことへの) 自発的・意欲的な参加ができるか、また、取り組みの態度はどのようなものであるかの実態を把握し、指導の手がかりとする。さらに、意欲・態度面の向上をみる評価ともする。

(考察) 指示を待って行動し、見通しを持たない生徒が多い。楽しい活動や好きなことには意欲的に取り組めるが、机上学習や作業には集中して取り組めず、根気も続かないという傾向がある。

(5) 段階別教育内容の到達度 (本校の段階別教育内容表による)



左の図は、N・S (発達段階8歳) K・T (発達段階5～6歳) A・O (発達段階2～3歳) の3名の段階別教育内容Ⅵ段階への到達率を一つのグラフに示したものである。3名の生徒に代表されるように28名の生徒達のプロフィールの広がりにはかなり個人差があるが、次のような共通点があげられる。

- ・職業化については、ほとんどの生徒に極端な落ちこみがみられ、この部分を引き上げていくことが高等部での課題だといえる。左図中のK・Tのように3年間の実践により、大きな変容がみられた生徒も多い。
- ・社会化の中の「社会のしくみ」にかかわる項目の到達率が極端に低く、落ちこんでいる。これは未経験によるためだと考えられ、

経験の拡大をはかっていく必要がある。

- ・表現化については、上図にあるように到達率の高い生徒も多いが、その力を応用的に生活の中で生かすことが難しいという実態がみられる。個々の実態に応じて、教科的な取り組みの中で培っ

ていきたい力である。

- 前頁のA・Oのように障害が重いため、プロフィールの広がり全体的に小さい生徒もいる。どの発達段階の生徒にも個々の課題に応じた対応ができるように工夫を凝らしていかなければならない。
- 以上の実態をもとに、高等部の生徒の特徴や問題点を次ページのようにまとめ、「めざす生徒像」「めざすからだ像」を設定した。

実態・問題点

- 素直で感情が豊かであるが、表現する力が劣っている。
- 自分のことはできないが、友達の面倒はみたがる生徒が多い。
- 見通しを持った行動ができず、言われてから行動する生徒が多い。
- 自己抑制する力が弱いために、集中力・落ち着きがなく、活動しきれない生徒が多い。
- 身体諸機能を自在に使いこなせない。
- 自信がなくはきはきしないことが多い。
- 障害認識ができにくい生徒が多い。



原因として考えられること

- 発達の遅れや障害による。
- 生活経験・体験不足のため、技能や意識等が定着していない。
- 発達段階に応じた運動経験の不足から、運動に関する諸機能や体力が身につけていない。
- 必要以上に手をかけすぎていて、過保護の傾向がある。



方針・手だて

- あらゆる身体活動経験の拡大と運動機能の向上、そして継続指導をする。
- 生活力向上のためのあらゆる経験・体験を多くすると同時に、社会人としての必要な動きや根気強さ等を育成する。
- 一人ひとりの持っている力を最大限発揮させ、活動させるための集団づくりや場の設定、環境づくり、教材の工夫などに心がける。



めざす生徒像

「すすんで生き生きとからだを動かす子」



めざすからだ像

- 何事にも自発的に取り組もうという意欲のあるからだ
- その意欲を支える耐久力のあるからだ
- 障害を自己認識して克服に努めたり、自己健康管理ができる力を持つからだ
- 社会の一員として自分を位置づけることができ、目的意識を持って生き生きと活動するからだ